

光とからくり

博士（芸術工学）日本写真学会フェロー
桑山哲郎

第23回 鏡(きょう/かがみ)の話題から

光学が物理の歴史を中心的に牽引してきた理由は、光が目に見えるため、高精度の測定に向いていることもあります。歴史の積み重ねにより、数多くの光学機器に関する用語が登場し、変遷しています。私は写真の趣味を始めて早々に「鏡玉」(きょうぎょく)という言葉に出会いました。ここで鏡(きょう)はレンズの意味で、カメラの撮影レンズは明治時代には、鏡玉が通常呼び方だった様です。「きょう」という用語は単独で用いられることはありませんが、多くの用語でレンズの意味、また目視で像を観察する部分に用いられています。「天眼鏡」は大きな凸レンズ、百円ショップの売り場では「拡大鏡」という売り場案内が下がっています。

「鏡」を含む多くの光学機器では、英単語と対照させることでこの事情がはっきりします。表1に並べてみましたが、「きょう」という読みが“scope”に対応することが大変多いことが分かります。医用機器の分野ではこの例は多数ありきりが無いのでこの表に留め貸した。専門的な解説をすると、「鏡」(きょう)の意味の広がりの中に、「鏡」(かがみ)に含まれない意味が存在することとなります。一方、光学像がその上に見えるという点だ、光学機器を設計あるいは製作する人以外は、レンズと鏡の区別はあいまい

で、日本語だけではなく英語や各国の言葉でレンズ、反射鏡、更にガラス素材の呼び方が混じり合っています。これに加えて、人類が最初に出会った映像装置、光学部品は屋内の水瓶の円形の水面であるとか、瞳の凸面鏡で、さらに瞳（厳密には角膜の表面）はその面に垂直に入射する光線を検出し、その結果広い世界が見えるのだと考えられたという話題も存在し、話はどんどん拡散してしまいます。

鏡を話題にしている本をすべて購入する訳にはいきませんが、興味がある本を集め続けてきましたのでまずタイトルだけを出版順に並べました¹⁻¹²⁾。すべて自宅にあるのですがすぐに見つかる本を並べ図1として撮影しました。続いて紹介を進めようと思ったのですがここで困りました。どの本も著者が力を込めて執筆している著作で、500ページを超える大著も何冊もあります。1冊の内容をキチ

表1 鏡(きょう)を含む光学機器名称と英語表記

漢字	英語表記
立体鏡	stereoscope
望遠鏡	telescope
顕微鏡	microscope
万華鏡	kaleidoscope
潜望鏡	periscope
内視鏡	endoscope
腹腔鏡	laparoscope
関節鏡	arthroscope
膀胱鏡	cystoscope



図1 鏡に関する本一式

ンと紹介するにはこの連載1回分でも不足します。そこで拾い読みをした一部の紹介と、表紙の写真の紹介で替えることにしました。幸い、50年近く前の出版物でも現在は入手が容易なことが多く、また所蔵している図書館も調べることができます。

紹介を進めます。図1の右端“鏡のマニエリスム”⁵⁾には、注目すべき一文があります。「〈鏡〉論は花ざかりである。いまさら私の出る幕ではなかったかもしれないが、日ごろ気になって考えていたことがいろいろあって、結局はこのような本になった。」と著者の川崎寿彦氏は1977年「あとがき」に書いています。この様な社会状況があったのでしょうが確認していません。鏡に関する本を集めるようになった契機は、図2の1978年刊行の季刊誌“is”⁴⁾によります。ミラーボールが表紙ですが、ここでは10人の著者による様々な切り口からの鏡論がと凝った図版が納められています。その後の出版物は、1993年前後にまとまっています。どの著作も一言で紹介できる内容ではないので、2点の表紙に触れます。図1の左に見える“鏡の歴史”¹²⁾では1647年から1951年にかけてベラスケスが描いたとされる“鏡のヴィーナス”を表紙にしています。ここでは、鏡が登場する決まり事に従った絵作りになっています。西欧絵画、日本の浮世絵、商業写真でも人物は画家あるいはカメラのレンズを鏡に見ています。これは観賞者に向け、人物が鏡の中に見ているものを示す必要があるためです。図3は“鏡の物語”¹⁰⁾の表紙です。1434年ヤン・ファン・エイクの“アルノルフィーニ夫妻像”が使用されています。「紋中紋」という見慣れない言葉が帯に目立ちますが、ご興味をお持ちの方はぜひお調べください。

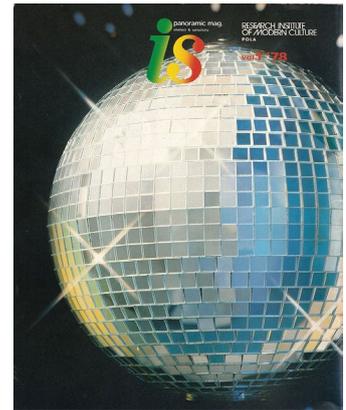


図2 〈季刊〉“is”の表紙



図3 “鏡の物語”の表紙

参考文献

- 1) 朝永振一郎，“鏡の中の世界”，みすず書房（1965 新装版 1995）。
- 2) 特集 鏡，月刊エピステーメー，朝日出版社，vol.2，1号（1976年1月）。
- 3) 多田智満子，“鏡のテオリア”，ちくま学芸文庫，筑摩書房（1976 新装版 1993）。
- 4) 特集「鏡」，〈季刊〉panoramic mag.is，創刊号(No.1)，ポーラ文化研究所（1978年6月）。
- 5) 川崎寿彦，“鏡のマニエリスム”，研究社選書1，研究社（1978）。
- 6) 由水常雄，“鏡[虚構の空間]”，SD選書146，鹿島出版会（1978）。
- 7) 堤信久，“江戸時代の柄鏡とその鑑賞”，私家版（1992）。
- 8) 加藤幹郎，“鏡の迷路”，みすず書房，（1993）。
- 9) バルトルシャイテス（著作集）4，谷川渥 訳，“鏡—科学的伝説についての試論，啓示・SF・まやかし”，国書刊行会（1994 原著は1978）。
- 10) ルュシアン・デーレンバック，野村英夫・松澤和宏 訳，“鏡の物語”，ありな書房（1996 原著は1977）。
- 11) サビーヌ・メルシオール＝ボネ，竹中のぞみ 訳，“鏡の文化史”，りぶらりあ選書，法政大学出版局（2003 原著は1994）。
- 12) マーク・ペンダークラスト，樋口幸子 訳，“鏡の歴史”，河出書房新社（2007 原著は2003）。



桑山哲郎 KUWAYAMA, Tetsuro
博士（芸術工学）日本写真学会フェロー
（当協会 人材育成委員会 委員，「光応用技術研修会」講師）